武蔵野日曜聖書講筵

深みに乗出せ
――ルカ伝第５章１～11節――

１９６８年１月28日
小池辰雄

主なり　福音を宣伝えざるを得ず　深処に乗りいだせ　「然れど」の一事　転進突破　おびただしき魚　第二の宗教改革　キリストの前に降参する　絶対次元の中に自分を入れる　聖霊の交わり　十字架で片づけられている　キリスト者らしさ　目からうろこ　百尺竿頭　大道無門

【ルカ５・１～11】

1群衆おし迫りて神の言を聴きおる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、2渚に二艘の舟の寄せあるを見たもう、漁人は舟をいでて網を洗い居たり。3イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼に請いて陸より少しく押し出さしめ坐して舟の中より群衆を教えたもう。4語り終えてシモンに言いたもう『深処に乗りいだし、網を下して漁れ』。5シモン答えて言う『君よ、われら終夜、労したるに何をも得ざりき、然れど御言に随いて網を下さん』。6斯て然せしに魚のおびただしい群を囲みて網裂けかかりたれば、7他の一艘の舟におる組の者を差招きて来り助けしむ。来りて魚を二艘の舟に満したれば、舟沈まんばかりになりぬ。8シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下に平伏して言う『主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり』。9これはシモンも偕に居る者もみな漁りし魚のおびただしきに驚きたるなり。10ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言いたもう　11『懼るな、なんじ今より後、人を漁らん』。かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。

●主なり

今日はルカ伝の第5章の1節から11節までです。見るがごとくに非常に劇的に書いてあります。ちょっとこれと似た記事がヨハネ伝の後ろの方にある。ついでに読んでおきましょう。ヨハネ伝21章のところに、これは復活のイエスがなさったわざなので、今のよりもう一つケタの違ったようなことです。

「1この後、イエス復テベリヤの海辺にて己を弟子たちに現し給う、その現れ給いしこと左のごとし。2シモン・ペテロ、デドモと称うるトマス、ガリラ

ヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及びほかの弟子二人もともに居りしに、3シモン・ペテロ『われ漁獵(すなどり)にゆく』と言えば、彼ら『われらも共に往かん』と言い、皆いでて舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。4夜明の頃イエス岸に立ち給うに、

「夜明の頃」というから、少し時刻が違うわけです。

弟子たち其のイエスなるを知らず、

これはもう復活のキリストで、イエスであることが分からない。

5イエス言い給う『子どもよ、獲物(えもの)ありしか』。彼ら『なし』と答う。6イエス言いたもう『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』。

これはだいぶさっきのとは違います。

すなわち網を下ろしたるに、魚夥多(おびただ)しくして、網を曳(ひ)き上ぐること能わざりしかば、7イエスの愛し給いし弟子、

「愛し給いし弟子」というのはヨハネのことです。

ペテロに言う『主なり』。シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、裸なりしを上衣(うわぎ)をまといて海に飛びいれり。

あいかわらずペテロ式なんです。

8他の弟子たちは陸(おか)を離るること遠からず、僅(わずか)に五十間(けん)ばかりなりしかば、魚の入りたる網を小舟に曳き来り、9陸に上がりて見れば、炭火ありてその上に肴(さかな)あり、又パンあり。10イエス言い給う『なんじらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』。11シモン・ペテロ舟に往きて網を陸に曳き上げしに百五十三尾(び)の大なる魚満ちたり、

ちゃんとはっきりと数まで書いてある。

斯く多かりしが網は裂けざりき。12イエス言い給う『きたりて食せよ』。弟子たちその主なるを知れば『なんじは誰ぞ』と敢えて問う者もなし。13イエス進みてパンをとり彼らに与え、肴をも然(しか)なし給う。14イエス死人の中より甦えりてのち、弟子たちに現れ給いし事、これにて三度なり。」（ヨハネ21・1～14）

似たような記事ですが、決してこれは同じ記事ではなくて、ヨハネ伝のは復活のイエスであり、ルカ伝のは伝道の最初の頃のイエスである。記事が矛盾しているわけでも何でもない。私はそのままにとります。

●福音を宣伝えざるを得ず

今日は、そのルカ伝の方ですが。その前の4章の終りの方に、

「43イエス言い給う『われ又ほかの町々にも神の国の福音を宣伝(のべつた)えざるを得ず、

この「ざるを得ず」がまた非常に強い「デイ」という言い方で、

「私は神の国の喜びの音信(おとずれ)を伝えずにはいられないんだ」

と、これが自分の本質的な使命であるということです。キリストにとっては、生きることは即ち福音を伝えることであった。

わが遣(つかわ)されしは之が為なり』

「私がこの地上に遣わされたのは、この喜びの音信を与えるためである」と。

44**斯てユダヤの諸会堂にて教を宣べたもう。**」（ルカ４・43～44）

という前提があります。キリストの言葉、業にみんな驚いているわけです。キリストの福音というのは言葉ばっかりではないですよ。言・行、言葉でもまた行為においても、どちらも喜びの音信(おとずれ)です。病人が片っ端から癒されてしまうし。キリストの言葉は烈しい言葉ですが、いわゆる律法ではない。力をもった救いあげるところの内容の言葉である。

1**群衆おし迫りて神の言を聴きおる時、**

「群衆おし迫りて」と言いましても、実は群衆もおし迫らざるを得ない。群衆がおし迫らざるを得ないのはキリストに引力があるからです。磁石に引きつけられるところの磁鉄みたいなものです。何か知らんが、この不思議な人のいるところにみんな群衆が集まってくる。

今の人だと、たとえば大学の総長矢内原先生がどこかで講演すると、「矢内原」というネームバリューに引きつけられてやってくる。それも悪くはないでしょうけれども、イエスのはそのネームバリューとかいうようなことではない。これは本当の神の子の実力です。神的な力が引きつける。

イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、2**渚に二艘(そう)の舟の寄せあるを見た**

もう、漁人(すなどりびと)は舟をいでて網を洗い居たり。

もう漁から帰ってきたわけです。

3**イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、**

帰ってきたのに、その舟にキリストは乗っかって、何をするかと思ったら、少し漕ぎだしてくれと。あまり群衆がおし迫ってきて、へたすると自分は渚から海に落とされそうだということもあったんでしょう。

彼に請(こ)いて陸(おか)より少しく押し出(いだ)さしめ坐して舟の中より群衆を教えたもう。

まさに大衆伝道、野外伝道です。日蓮でも誰でもみんなやりましたが。辻説法というようなわけです。至る所これキリストにとっては会場である。なにもまとまったある所が会場でも何でもない。内村鑑三先生が

「無教会」

なんてことを始めたその精神も、こういったところからでもありましょうけれども。教会の牧師さんだっていくらでも野外で説教もしますし、何ということはないですが。

●深処に乗りいだせ

4 **語り終えてシモンに言いたもう『深処(ふかみ)に乗りいだし、網を下(おろ)して漁(すなど)れ』。**

なにも聞かないで、いきなり「深処(ふかみ)に乗りいだせ」と言う。新しい聖書には「沖」と訳してあるが、本当はギリシア語の原典では深みという字なんです。「エイス　ト　バトス」と言いまして、

「深みの中へ」

ということ。「深み」というのは要するに距離からいうと、沖でなくては深くないものだから、「沖へ」と同じことになりますけれども。沖合の深いところへということ。だから、ゲネサレの真ん中あたりでしょうね。諏訪湖を想像すればいい。あれくらいの湖ですから。そこへと乗りいだして行って、そこでお前たちの網をたれてすなどれと。

「すなどりのために、漁獲のために」

という言い方になっています。

5 **シモン答えて言う『君よ、われら終夜(よもすがら)、労したるに何をも得ざりき、**

大体、漁に出るのは夜です。昼間出ていくのはむしろあまりない。漁師ですからちゃんと天候だとかいろんな具合は知っている。

「何も得なかったので、それはちょっと無理ですが」

というわけです。

然(さ)れど御言(みことば)に随(したが)いて網を下さん』。

「然れど」というのは短い「デ」という字です。

「しかし、あなたのお言葉に従って、網を下ろすことにしましょう」

と。自分の経験や知識、そういったことから判断するとそれは無理なようですが、

「あなたが仰るんだから」

というわけです。

「然(さ)れど御言(みことば)に随いて網を下さん」

というこのペテロの言葉は注目しなければならないと思います。

●「然れど」の一事

要するに、信仰の世界はこの

「然れど」

の一事なんです。

「しかしながら」

と。自分の判断を始めは肯定しているわけです。自分はいろいろやってみたが、とても見込みはない。今までの自分の経験と知識を――みんなあなた方はそれぞれ自分のすることで持ってますね――ところが、「然れど」と言って、それを否定する。

今、実は自分の経験と知識でいろいろやってみたがダメだったというひとつの、ある限界に来ている。漁がダメなんです。ペテロはこの際、あるひとつの限界状況にきているわけです。

「今日はダメだ。一向しけてしまっている」

と。今の現況はマイナスの現況である。ペテロたちはそういう限界状況で先に進めない。

「まぁ、仕方がない。明日にしよう」

というようなわけです。ところが、キリストはその行き詰まったところにおいてなお見るものを見ている。そこで、

「深みに乗りいだせ。お前たちは今日は本当の意味において深みに行ってないではないか。ところが、今日の漁はあちらの深みにあるんだということを、お前たちは経験や判断から測りそこないをしている」

と。即ち、自分の判断と経験と知識というものに対して、それを乗り越えて、

「だけれども、あなたの言葉に従って」

と。これを我々の現実でいうと、

「しかしながら、これは聖書の言葉なるがゆえに」

ということです。

聖書を読みますと、福音書を我々の知識や経験で読もうとしたって、これは読めないんです。だけれども、

「**然(さ)れど、御言なるがゆえに**」

と言って、

「こんなことがあるか、ないか」

なんていう自分の判断を越えて、

「然れど、聖書の言葉なるがゆえに無条件にこれを受けとっていくぞ」

と。これが、この

「**沖に乗りいだせ**」

と同じ気合になる。聖書というものを、そういった

「**然れど御言なるがゆえに**」

と言って、捨身でこの言葉に自分というものを合わせていく。自分というものをその言葉の現実の中へと合わせていく。これがいつも私が申し上げている、

「聖書は教えではない。ドラマだ。ドラマの中に自分の身を投ずることが聖書の言葉に合わせるということである」

ということです。「然れど聖書の言葉なるがゆえに」無条件にこれを受けとっていく。

即ち、「然れど」と言うときには、自分は降参しているわけだ。無条件降伏しているわけだ。もう自分は自分の判断を乗り越えて、聖書の言葉に降参して、それを百％に受けとる。

今までの自分のプラスをやめて、今度は自分をマイナスにしてしまう。そして、然れどなんじの言葉、聖書を完全にプラスとしている。聖書がプラスである。この聖書の現実の中に自分をいれて、

「そうだっ」

と言って、その現実の中にペテロは入って行ったでしょ。そうしたらどうですか。もの凄い大漁となった。キリストはウソは言わない。その大漁の現実にぶつかった。

●転進突破

6斯て然せしに魚のおびただしい群を囲みて網裂けかかりたれば、7他の一艘の舟におる組の者を差招きて来り助けしむ。来りて魚を二艘の舟に満したれば、舟沈まんばかりになりぬ。

いまだかつて経験しなかったような大漁がそこに起きた。まぁ何という、イエスというひとは驚くべき人間であるか。キリストはある潮時をパッとつかまえて、そして、その瞬間をつかまえてペテロの人生に一大転換をここにもたらせようとしたわけです。我々も、この「然れど」というこの一言をもって180度の方向転換をする。こちらに向かっていたものを今度は転進するんだ。

昔は戦争で「ガダルカナルの転進」という言葉があったが、あれは後退のことを転進なんて、いい加減なことを言った。これは今度は本当の意味で転進するんだ。行き詰まってしまったから、方向転換をして進む。今度は、私はこの転進という言葉を非常にいい意味で今ここで使うわけです。

転進しなくてはいかん。「然れど」と言って、自分の行き詰まりから方向転換する。転進する。これはまた別の言葉でいえば、「突破」である。限界状況を突破していく。突破して転進した。自分の方向とはちがった。自分たちが引き上げた方向から、引き上げ方向から全く今度は別な方へと方向転換して進んで行く。これがキリストの

「深処に乗りいだせ」

という、この汝の言葉に全托したわけです。

皆さんが聖書にぶつかって、深処に乗り出すという角度の読み方をしなかったら、聖書はいつまでたってもダメだということをはっきり申し上げておきます。そこらの註解書をお読みになっても結構ですが、本当に深処に乗り出して聖書と共感しているような註解でなかったら、いい加減な註解を読んだら、かえってマイナスだ。聖書の言葉に水を割るような註解だったら。

大体、聖書以上の註解なんてものはまずありはしないんだ。聖書は註解は要らないんですよ。私も註解なんて書いて申し訳ありませんけれども。しかし、それは聖書はいかに註解がいらないかという註解なんです。私の『曠愛新書』なんていうものはそういう意味で

読んでいただきたい。実に聖書は、「言葉通り」というよりも、言葉はなお言葉の奥の世界が言えないで困っている事態があるから、それを

「こういうわけなんですよ」

というようなわけで言うような、そういった意味の註解ならば、結構なことですけれども。水を割るような註解をされたのでは、註解はない方がいい。無限な余韻を持っている、響きを持っている。寺の鐘でも、あの余韻があればあるほど鐘の響きはいいわけです。すぐ音が消えてしまうような鐘はダメなんだよな。

どうぞ、端的にこの現実に自分の魂を合わせて、乗りかけて読んでいただきたい。そうしたらば、我々の相対的な現実をはるかに越えた次元の現実ですから、そういう読み方をする人は必ず聖書を読みながら力を得ていく。もし、聖書を読みながら力を得なかったならば、その読み方は本ものでない。それであなた方は自分を判断したらいい。私は本当に聖書を読んでいるだろうかと。

「意味が分かった」

なんていうのはダメですよ、「意味」なんていうやつは。

「大体、意味が分かったようだから、これで結構です」

なんて。意味なんていうものではない。力です。

「我が言は生命である。霊である。力である」

という。聖書を読みながらそこに、そういう生命や力を、霊的現実を、霊的生命、霊的な力を受けとっていけば、その人は本当に聖書の現実に身を投じて、身体を投げかけて読んでいるという、本当の読み方ができている。そういうような読み方の魂の角度は何かというと、祈りの心なんです。

祈り心とは何でもない。何かお願いではない。自分を投げかけることが祈りということです。自分をキリストの中に投げかけること、御言の世界の中に投げかけること、これが祈りです。自己を抜けていくことが祈りなんです。限界を乗り越えていくことが祈りなんです。そういうことになったら、必ず力が来ますから。そうしたら、本当にその現実が読めているわけです。

●おびただしき魚

「深みに乗り出せ」と言ったら、自分で力んで乗り出そうとしたって、それはダメです。

「深みに乗り出せ」

という、こういう言葉がありましたら、深みに乗り出すことのできる者はキリストなんですから、このキリストの中に自分を入れると、自ずから深みに乗り出すような態勢になってくる。そうすると、力が来ますから、深処に乗り出すことができるんです。

キリストの命令には必ず実力の裏付けがあるということを知ってください。人間の先生

が、「勉強しろ」なんて言うのと違う。

「私と一緒に勉強できるぞ」

と言うような先生が本当の先生なんだ。だから、学校でいうと、ゼミナール式な勉強の仕方が一番いいわけです。30人以上で教場でやっているようなのは本当の授業には実はならない。けれども、何人いようが、例えば一人の生徒に向かって先生がやっているときに、他の生徒が、

「あれが今指されているから私は関係ない」

なんて、ノホホンな顔してたらダメです。Bの人が指されて先生とやっているときに自分もまたBになっていなくては、本当の授業を受けているのではない。そうしたらば、何人いても、それが本当の授業になる。本当の授業は実は数によらない。受ける人たちの態度による。そうすれば必ず本当に授業になる。50人いようが、60人いようが、本当の授業ができるわけです。これが、他がみんないい気になっているからダメなんだ。授業などで時間が少ないと、私はどしどし自分でやっていたりすると、学生は

「先生は一人でやっていらぁ」

なんていう気持で聞いてたら、それはダメですよね、一緒になってその中に入ってこないと。要するに、何も授業に限らず、すべてそうなんです。

この日曜はまさにそれで、私が語るのも皆さんが聞くのもこれは同じことでありまして、今、ルカ伝5章1節から11節のゲネサレの海の漁(すなど)りの現場に今、我々が居あわせて、キリストに立ち向かって、こちらがペテロとなっているという、そういう現場に自分自身をペテロにおいてのしかかって行かなくては。それはもはや目で読んでいる世界ではない。それはもはや頭で読んでいる世界ではない。自分をその中に入れているということは投げ出しである。投げ出しは即ち祈り心である。

「然れど御言に随(したが)いて網を下さん」

ということが、

「然れど聖書なるがゆえにこれを文句なしに受けとらん」

というわけです。そうしたら、おびただしき魚がきた。魚が採れてしまった。我々が聖書にぶつかって、

「おびただしき魚」

とは――豊かなる食べ物とか、豊かなる草とか、おびただしき魚とかいうものは何かといえば――実はキリストの生命そのものです。この場合、キリストは「魚」を伝道の相手になるたくさんの人のことに思っておられたでしょうけれども、もう一つ別な角度からみれば、この「おびただしき魚」というのは、得たところのものはまずキリストなんです。人間ではない。

この「魚」という字は

「イクトゥス」（ＩＸＴＵＳ）
といいまして、
「イエスース　クリストス　テウー　フュィオス　ソーテール」
といって、これは暗号になっているんです。この「魚」が
「イエス・キリスト、神の子、救い主」
の頭文字なんです。ローマで迫害されていたクリスチャンたちが「キリスト」なんていう名前をうっかり言えないものだから、「魚」を書いて暗号にしていた。魚はキリストを現している。頭文字でそういうことになる。

●第二の宗教改革

だから、この「魚がおびただしく」というのは、イエス・キリストを、即ち聖書の深みに乗り出して行ったらば、この御言の中からつかみだすものは、

「我が言は霊なり、生命なり」

という霊にして生命なるものの主体は、そのものはキリストです。キリストが本当の神の霊であり、またキリストが本当の神の生命ですから。「我が言は霊なり、生命なり」というのは、言においてキリストを捕まえなかったならばどうにもならん。キリストを捕まえたらば、またキリストに捕まえられたら、そこに本当にその人を通してキリストが証しされる。キリストが証しされることが伝道なんですよ。

「汝らはわが証者となれ」

という。伝道というのは何か自分でもって考えだした何かではない。その人を通してイエス・キリストというものが証しされていく。それが即ち証者です。キリストの者のらしきものがそこに、キリストがあるから「らしさ」が表れてくるんです。即ち、一人びとりがまずキリストを豊かに受けとっていけば、自（おの）ずから一人びとりがその証者となる。証者となることが、これが伝道である。

今日は伝道集会ということで、幾人かの方が新しい方を連れていらっしゃった。まことにそれは結構なことです。そしてまた、来られた人が

「これはどうもいわゆるお説教ではなかった。我々は本当に聖書の事態を身につけて行こう」

ということで、今度はその方々が知らないまにまた伝道者、証者となっていく。福音の伝道はかくして伝わるのが本当の伝わり方です。グラハムなんていうのが来て、何千人も集めてやる伝道もそれは伝道でしょうけれども。そして、決心カードとか何とかというものがあるようですけれども。しかし、人間的な決心でなくて、止むにやまれずして動きだすようなのが本当の動き方なんです。

キリストは、即ち彼自身が神の証者です。イエスは神の証者です。皆さん、若い人たちは、

「神がどうのこうの」
なんて言う人には何も議論する必要はないですよ。有神論も無神論も多神論もヘッタクレもない。どんな結論が出たってどうにもならん。
「来たりて視よ。この福音書を読め。福音書を読んでキリストにぶつかって、そこに神を見ないやつはいつまでたっても、百年たっても、神さまは見えないぞ」
とはっきり言いなさい。それだけのことがはっきり言えるだけの権威をもたなければダメです。ナザレのイエス・キリストにぶつかって、
「この人には参りました！」
ということにならなくては。我々の判断や常識一切を超越したところの、この言葉とこの動き、言動、その前には正直、平伏さざるを得ない。
たとえば、今のルカ伝のこれを見たって、もう文句なしです。これだけのことがズバリとできる人がいるかと。彼は専門家よりもはるかに素晴らしい素人（しろうと）です。イエスは、どんな画家も、どんな大工も、どんな医者も、どんな学者も、およそ人間の持っているいかなる範疇（はんちゅう）のものも絶ち越えたところの何者かである。これはどこから来ているかというと、彼は神の霊を本当に宿しているところの、神の霊と神の智慧を宿しているところの、不思議な証者である。
今は原子力時代と言うが、このキリストという原始力――今度４回ばかりキリスト新聞に連載されますから、それを読んでください――このキリストという原始力をうちに宿すような、あなた方自身が原始力体となる。これが
「辛子種一粒の信」
というんです。この原始力体となれば、今の原子力時代に、実は宗教の世界では新しい原始力的人間が現れはじめたという、あなた方一人びとりがその証者となれば、これが言わず語らずのうちに第二の宗教改革を――誰かが宗教改革をするのではない――あなた方一人びとりが
「第二の宗教改革」
をやってくださいよ。今はそういう時なんです。もう、このキリストを頂いたら、受けとったら、一人びとりが、人のどう思う思わないにかかわらず、そうならざるを得ないはずです。

●キリストの前に降参する

8 **シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下（ひざもと）に平伏して言う『主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり』。**

そこで、ペテロもヨハネもヤコブも驚いてしまったものだから、ペテロは今度は、「君よ」と言うのをやめて、「主よ」になってしまった。言い方が違ってしまった。

「私から去ってください。どうも畏れおおい。私は罪あるものです」
と。
「私は罪ある人間である」
と、初めてこの時にペテロは、
「ああ、俺はダメな漁師だ」
とは言わないで、「罪ある人だ」と言った。そこにまたペテロのペテロたる善さがある。即ち、本当にそこで、
「汝自身を知れ」
という自己認識ができた。キリストの力は――力と言いましても、腕力ではない――神の聖なる力ですから。その聖なる力、霊的人格、この霊的な力ある人格の前に自分を映し出したら、
「自分はなんと無力な、また罪深き者であるか」
という認識にきたわけです。これが、私がしょっちゅう言うところの、
「福音書のキリストの前に降参する」
とはどういうことかというと、そういうことなんですよ。ただキリストの言が素晴らしいとか、ただキリストの業がケタ違いだとかいうことではないので――もちろんそうなんですけれども――そのケタ違いの内容は何かというと、ルカ伝に言っているとおり、キリストは証者である。神の人である。特別な証者である。そして、その前には我々は「罪びと」にすぎない。
預言書たちの自覚がみんなそうです。イザヤ書6章に、
「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍のエホバ。我はまことに罪の中に生まれた汚れた者である」
と書いてある。あの預言書イザヤが平伏してしまった。そしたら、火焔天使が来て、イザヤの唇を焼け火箸で焼いた。もちろんこれは霊的な幻です。それで
「お前は聖められた」
というひとつの徴を与えられて、そこでイザヤははばからずして、
「我なり。どうぞ、お使いください」
と言ったわけです。この
「主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり」
ということは、ダニエル書10章、イザヤ書6章というのがやはりそういう角度の告白です。
9 **これはシモンも偕に居る者もみな漁(すなど)りし魚のおびただしきに驚きたるなり。**
10 **ゼベダイの子にしてシモンの侶(とも)なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。**
ヤコブもヨハネも同じく驚いた。しかし、漁が多くて驚いたばかりでない。もし、漁の多いことにだけ驚いて、これは素晴らしいなと言って、「ありがたい、ありがたい」としたら、

それは御利益宗教になる。そういうのがたくさんあるんだ。

「ああ、これは素晴らしい霊験あらたかなことだ。イエスという人は素晴らしいひとだ」

と言って、その御利益をありがたがってしまったら、魚そのものを、その量や数をありがたがってしまったら、それは御利益宗教になってしまう。

「おびただしき魚」において表れたところの主体を見なかったらいかん。魚を見るのではない。魚を通してキリストという魚を見なければダメです。キリストという魚を捕まえた人は本当の信仰に入る。ところが、病が癒された、やれどうなったこうなったという、それをただ感謝している者は、それだけを感謝しておしいまいということになって、これは御利益になる。それが来なければ、もう信仰は止めてしまうということになる。それだけの話です。

ところが、キリストにぶつかった民衆にはそういうのがたくさんいたから、本当の信仰に入れなかったのがたくさんいます。もったいない話ですよ。そこにおいて表れているところの事態を通して、キリストを見なくては。現象を見なくたって、

「見ずして信ずる者はさらに幸いなり」

というのはそのことなんです。何も現象を見ないでも、キリストという本体をグッと捕まえれば、それは本当の一直線だ。

●絶対次元の中に自分を入れる

ところで、キリストに平伏して、

「我を去りたまえ」

と言って、隔たりをしてしまったものだから、今度はキリストはシモン・ペテロに何と言われたかというと、

イエス、シモンに言いたもう　11『懼るな、なんじ今より後、人を漁らん』。かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。

この「漁らん」という字は、今からお前は人を「生け捕りにする」という字なんです。人を生け捕りにするというのは、逆にいうと、人を捕まえて活かすという意味です。

「人を生け捕りにする者になるぞ」

ということ。

「懼るな」という字は「メー　フォブー」という字ですが、福音書を読むとこの「懼るな」という字がしばしば出てくる。マリヤもそう言われた。

「聖霊によって身ごもる」

と言われたら、マリヤがこわがった。そうしたら、天使が「懼るな」と言った。クリスマスの前の晩に牧人たちに天から光が現れてきて、牧人たちも何事かと思って恐れた。そし

たら、

「**懼(おそ)るな、汝らのために救い主が今日、生まれるんだぞ**」

と。次元の違ったものが現れると、こわがることはもうしょっちゅう我々も経験するところです。幽霊が出てくれば、ちょっと次元が違う世界ですから、恐がる。どうぞ今度は、幽霊が出てきたら、恐れないでください。

「どうしましたか？」

と聞いてやる（笑）。

「大丈夫ですよ」

と逆に慰めてやる。

そういう懼れなき世界に入れようという。懼れること自身が別にそう悪いことではない。しかし、その次の瞬間には、それを乗り越えなかったら、しょうがないわけです。人間の感情では、ちょっと恐れることもあるでしょう。しかし、その次の瞬間には――実はこれは懼れなき世界に、もうひとつ次元の違った絶対次元の世界に自分を入れてくださるための道であるということを受けとって――絶対次元の中に自分を入れる。本来、我々の魂が、心や何かが恐れるということは、絶対次元からズレているから恐れるんです。

皆さんの魂は本来、絶対次元のものなんです。相対界に我々はいますよ、現実は。けれども、この次元的な相対的な世界にいるんだが、いながら実は、本当は魂は絶対次元のものなんです。絶対次元のものであるのに、その質を失っているから恐れるんです。その質が来れば、絶対次元の世界に、深みに乗り出して、キリストの中に、キリストという深みに乗り出してごらんなさい。そうしたらば、キリストはいつでも入ろうとしているんだから、ここに同次元の同質性がくる。

キルケゴールは「同時性」なんて言ったけれども、むしろ同質性です。この同質性の世界に入ってきたらば、懼れなくなってしまう。この同質性になるまでは、

「我が魂は汝のうちに休らうまでは、安きを得ず」

とアウグスチヌスが言った

「汝のうちに休らう」

ということは、

「汝と同質性になる」

ということなんです。お母さんの懐に抱かれると、小さい子は安らって眠りますよね。「汝のうちに休らう」までは、子どもは安きを得ない。そういうような具合に、汝の懐の中に安らうということが同質性に入るということです。

●聖霊の交わり

同質性になってきますと、もう何も恐くなくなる。恐いものがなくなってしまう。それ

が本当の信仰というんですよ。信とは、あっち側に素晴らしいものがあるということを信じているのではない。信とは、その信と交わる世界だから、いつも私が書くように、

「信交」

ということです。仰いでいてはダメだ、交わる世界に入りなさいということ。信交の世界に入る。「交わる」という字は「コイノニア」という字です。クリスチャンがコイノニアという言葉を、「お互いの交わりを」なんて言って、ただ横の関係にばかり使っている。けれども、パウロは、

「聖霊の交わり」

と言っているではないですか。これはコリント後書の一番終りの言葉だよ、

「13 **願(ねがわ)くは主イエス・キリストの恩恵(めぐみ)・神の愛・聖霊の交感(まじわり)、なんじら凡ての者と偕にあらんことを**」（コリント後13・13）

と。牧師さんがしょっちゅう、集会の終りにこれを言っている。私は言わないけれども。

「主イエス・キリストの恩恵(めぐみ)」「カリス」、

それから、

「神の愛」「アガペー」

「聖霊の交感(まじわり)」「コイノニア」

これが汝ら凡ての者と偕にあらんことをと。これをしょっちゅう言って、空念仏になっている。牧師さんも聞いている方も空念仏ではしょうがない。

聖霊の交感(まじわり)というのは、この信交のことです。聖霊の交わる世界が本当の信なんです。神の恩恵だとか、キリストの愛だとかいうのはみんなこの聖霊の交わりの中に下りてくるものなので、聖霊の交わりがなかったら、神の恩恵もキリストの愛も来やしませんよ。キリストという恩恵、キリストという神の愛なんだ。それが聖霊の交わりにおいてやって来る。それを信という、信交という。「ピスティス」という。これが本ものなんです。

●十字架で片づけられている

だから、「懼るな」ということがそうなんです。平伏して、

「ああ、私は罪びとです」

というその自己認識は結構ですよ。しかし、それでお終いではダメです。キリストは、

「お前がダメなことが分かったかね。降参したね。それではもうあとは心配いらんよ。私が入っていくから」

と。それが逆でもいいですよ。

「もの凄いものを私は今日は経験した。それだから、私は自分がいかにダメであることを知ったので、降参しました」

と。どっちだっていいよ。とにかく、どっちにしろ、自分というものがそこではっきり片

づけられる。それを片づける一番大事なものが十字架なんです。十字架で片づけられている。

「お前は自分で自分を片づけることができない。自分はダメだと言って平伏しても、それは本当の平伏しにならない。本当の平伏しは、十字架を見てごらん、ここにお前は本当の平伏しを見る。私が贖いとってしまったんだから」

とキリストは仰る。

「十字架で私は、お前の自我というやつを全部すっ飛ばしてしまったんだから。そのことが分かったら、お前はこの十字架を本当に仰ぎみて、その中に自分が同じく入ってしまったならば、『我れキリストと共に十字架せられり』ということになったら、そこが本当の平伏しだ」

と。本当の平伏しの場は、

「我れキリストと共に十字架せられり」

という場が本当の平伏しの場ですよ。そこでぶっつぶれて、もう何も残っていやしない。そうしたらば、キリストは

「さぁ、懼れなき世界に来なさい。私は無条件にお前を迎え入れる。お前の人格だとか、お前の何とかだとか、そんなものはひとつも問わない。過去がどうであろうが、現在がどうであろうが、未来がどうなろうが、いいよ」

と。これが絶対無条件の恩寵というんです。

●キリスト者らしさ

「小池先生は伝道者らしくない」

なんて。いいですよ、全然らしくなくても。もし、私が「らしさ」を持たなければ伝道ができないなら、私は今日でも止めますよ。今日でも兜（かぶと）を脱ぎます。けれども、ペテロなんていうのも弟子らしくないんだ、しょっちゅう躓いたり転んだりして。弟子らしくないやつをキリストは捕まえて、

「懼（おそ）るな、私はお前を使う」

と言われる。これが絶対無条件の信の世界です。信の世界から、「らしさ」がだんだん出てくる。信の世界から本ものがだんだん現れてくる。だから、私の中に「らしからざるもの」が「99」あって、「らしきもの」が「1」あっても、この1つの「らしきもの」は――これは私が持っている「らしき」ではないんだから。キリストが来なければ、この「らしき」は、

「キリスト者らしさ」

というものは出てこない――キリストが来たこの聖霊の信というものは、この「らしからざるもの」を必ずやっつけていく。だから、

「これを見てくださいよ」

と私は言う。これを見ていけば、いかに「らしからざるもの」に会っても、なおかつ

「先生は本当のらしさを持っている。だから、私はついて行く。私も行きます」
ということになる。
皆さんは、みんな「らしからざる」人でいいよ。たとえば、O君という「らしからざる」人がある。けれども、そのO君の中に本当の「らしさ」がチラッと見えた。「それだっ」というので行くんです。それでお互いの信がそこから来る。それは本来、O君にないところの凄いものなんです。それがキリストというわけで、これが本当の――信者というならば――キリストを受けとっている者です。それで勝っていく。お互いにそれを見て、それを信じている。そして、人間は一人びとり特別に特定できますから、世界中どこを捜したって、O君という人物は他にはいない。O君という人物の一番O君らしきものの中に、本当の「らしさ」が入ってくる。世界に何億人いようが、キリストがそのO君という個をとおして現れてくる。これが本当の「らしさ」なんです。
あとは「らしからざるもの」がいくらあったって大丈夫だよ。そんなものはみんな消えていくから。もし、相対的判断で、
「あの人はもっとクリスチャンらしくなければ、もっと先生らしくなければ」
というような判断をしてお互いにやっていたら、これはみんなガタガタになりますよ。我々の「人を信ずる」とは、その深みにおいて、一番その人の深みにおいて何が光っているかと、これでいくわけです。

●目からうろこ

これでもって、「懼(おそ)るな」と言う。
「はい、心配いりません」
と答える。
「お前は躓いたり転んだりする男だね」
と、キリストはペテロのことをいう。ヨハネというのはすっとしているものだから、キリストに人間的には好かれたらしい。けれども、それだからヨハネはどうなんて思ったり、それだからペテロがよりどうだなんて思ってはいかんですよ。私はおもしろい「天国篇」を書いてやろうかと思ってんるんだけれども。
相対的判断でいえば、パウロというのは一番凄い野郎だよ、とにかく。彼は一番知識もあったし、学問もあったし、
「**律法の義につきては責むべきところなし**」
なんて自分でも威張っているようなやつなんだ。けれども、その一番神の人らしきものが、キリストにぶっ倒されたでしょ。「なんだ、お前のらしさは」なんてなわけで。パウロは、その「らしさ」が「アズ・イフ」（かの如き）だった。「アズ・イフ」の「らしさ」ではダメだと、復活のキリストにさんざん撃たれる。自己義認ですから。さっきのペテロが、

「私は罪びとで、ダメでございます」
というのとおよそ反対で、「責むべきところなし」なんて自ら認じているのだから。この自ら認じているのを人からみると、なるほど品行方正、学術優等なんだよな。大体、みんなにも
「ああ、素晴らしい」
なんてやられている。ところが、キリストは
「ダメだ、お前は」
と、彼をやっつけてしまった。それでサウロ（後のパウロ）はキリストにぶっ倒されてしまって、もう完全に参ってしまった。
「わが目より鱗の如きもの落ちたり」
と。自分で自分をいいなんて思ったのはとんでもない間違いだと気がついた。今度は、これを彼は塵芥（ちりあくた）としてしまった。そこがまたパウロのよさです。完全に自分を塵芥として、
「あなたの義です。あなたの愛です。あなたの生命です」
と言って、完全に平伏しの魂になった。そこで今度は本当のパウロらしさが出てくる、キリストを通したパウロらしさが。
人はそれぞれにいろいろ造られていますから。そのそれぞれの在り方において、パウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、みんなこれは違うんだ。みんなそれぞれの善さをもって、この福音の、キリストの証人となった。
決してこれは比較を許さない。絶対に比較を許さない。人間において神の現れている姿は天下一品でありまして、どっちがどうということはない。そういうのが本当のハーモニーの世界です。チューリップもカーネーションも、どれもこれもそれぞれのらしさを持った善さを持っている。全部同じ花だったら、どうにもならん。
そういうことで、どうぞ、神さまの方からは、その知識も問わなければ、その実存の加減、人格がどうのこうの、そんなことすら問わない。
いいですか。ずいぶん、私の今日の話の次元は高いんですよ。間違えてとっては困るよ。そういう、何ものももはや問わないところに、その人を通して本当のものが現れていく。人にはどう思われようといい。
どうぞ、皆さんの中に入ってくるところのもの凄いものを本当に――そのためには、深みに大胆率直に乗り出してください。キリストという、聖書という、この次元の中に大胆率直に自分を乗り越えて入っていく――そうしたら、キリストという大漁を得る。キリストという大漁を得たら、もはや相対的な、
「やれ自分の知識がどうだ、その人の人格がどうだ、なんだかんだ」
というようなことはもはや問題でないところの世界に入っていく。それが本当の霊的人格の形成になってくる。

皆さんの魂の気合というものが、福音の掴み方というものが、そういう質のものになってこなければ、本当の力強い展開はしませんぞ。どうぞ、そういうことで、もはや恐れなき世界に本当に入っていく。であるから、いよいよ、パウロも同じごとく、この平伏しの魂です。

「**ああ、われ悩める人なるかな。この死の体より我を救わん者は誰ぞ**」（ロマ7・24）

と、救われたパウロも言っている。けれども、どんなに自分がダメでも、決してそれは自分をもはや虜にしません。恥さらしのままに行きます。何となれば、この土の器の中にある活けるキリストという宝を何と代えることができるかと言う。これが本当の自信であり、本当の権威であり、本当の栄光であるんです。

●百尺竿頭

無門関の中にこういうのがある。第四十六則というところに、

「石霜和尚云く、「百尺竿頭、如何にか歩を進めん」。又た古徳云く、百尺竿頭に坐する底の人は、得入すと雖然も、未だ真と為さず。百尺竿頭に須らく歩を進めて、十方世界に全身を現ずべし」と。」

「石霜和尚云く、「百尺竿頭、如何にか歩を進めん」と。」

よじ登って行って――向上の精神だよな――一番上を極めてしまった。自分はこの学問ではもう相当のところに行ってしまった。自分はこの技術では相当のところに行ってしまったと、みんなそれぞれ大いにある意味において達した境地に入った人です。そうしたら、その先はどうしたらよかろうかと。もう大体、竿頭まで来てしまったのだから。教授、博士なんてなわけでね。どうしたら、その先を行きましょうかと。

又た古徳云く、百尺竿頭に坐する底の人は、得入すと雖然も、未だ真と為さず。百尺竿頭に須らく歩を進めて、十方世界に全身を現ずべし」と。

百尺竿頭に坐りこんでしまって、そして

「もう俺は充分、人生の目的は達した」

なんてなわけで、おさまりかえってしまった人は、道を悟ったようでも、それはまだ本ものではないよと。

「百尺竿頭に須らく歩を進めて」

百尺竿頭をさらに歩を進めたら、どかんと落っこちるでしょうが。

「十方世界に全身を現ずべし」

という。

この禅宗の答としては、ただ上に登るばっかりが能じゃないぞと。百尺竿頭に来たら、今度はスルスルと下りてしまえ。向上から、今度は下向せよと。スルスルと下りて、今ま

で得たところのものを実践的に普通の世界でやって行けと。たとえば、禅の世界で大悟したなら、今度は大迷の世界に入れという。大きな迷いというのは、何でもしろと。雑巾掛けでも何でも。何でもないことをやりなさい。大いに迷っているようだが、

「実は本当の悟りの世界は日常生活の実践のうちにあるんだ」

ということを言おうとしているわけです。ただ坐禅を組んで悟ることが悟りではない。そこである境地を本当に捕まえたらば、それが本当に実践の世界で自由自在に、何をしてもそれが本当に現れるようなことでなくてはいかん。

剣道の達人に――勝海舟ですよ――禅を聞きに来たときに、

「では、道場に来なさい」

と言って、道場で剣道をやって、それでお終い。何か説明してくれるかと思ったら、何も言わない。

「私の剣を見て分かったかね」

と。即ち、剣の中に禅宗が溶けているわけです。何をしても、我々の信仰というものが、その人を通して何をするのでもそこに溶け込んでいなければ、実は本当の悟りではない。本当に得道しているわけではない。道を得ているわけではない。

●大道無門

十方世界に全身を現ずるキリストの如き者となって、

「あそこに行けば、深みに乗り出せば、そこに漁があるということがお前がつかめるようになるためには、今までの技術や今までの経験ではダメだぞ。もう一つ先の世界に、絶対界に躍り込め」

と。そうしたらば、十方世界に身を現ずることができるようなことになる。キリストは正に十方世界に身を現じているようなひとです。復活のキリストはもちろんそうだし、現実の相対的なキリストが何をするにおいても絶対に環境に囚われてはいない。現象界、相対界にいながら、もはやそこがすべて絶対界になっているようなひとです。そういったのが本当の信の現実です。信仰の現実とはそういうものである。

「深みに乗り出す」ということがいかに自分の限界状況を脱して。我々は限界状況です。

「相対的現実から絶対界に入れ」

と、それが深みに乗り出すことです。聖書の世界は絶対次元の世界ですから。聖書を受けとるためには、この角度に入らないで、解釈の、研究の、何のと言ったって、これは入れっこない。それは回りを回っているだけの話です。入るためには、そこを乗り越える。乗り越えるためは、提身の捨身の祈りです。自分を投げかけている祈りでなければ乗り越えられない。しかも、乗り越えるところは、こないだヨハネ伝でやったところの、ちゃんと門がある。

「大道無門」

というが、キリストという大道は、どこに行かなくてはということではない。

「至るところに門がある」

ということは無門ということです。

その境地を、皆さんが祈祷会をするなら祈祷会で、また独りで祈るとき、聖書を読むときは、正にその事態です。次第次第に入ってくださいよ。私たちが毎週、集会というものを真剣勝負でやっているのは――この集会そのものが全体が祈りですから――それで入っていくわけです。何回か来ているうちに、何だか知らないがだんだん楽になってしまったというなら、本当に受けている。さっき言ったように、力の世界であって意味の世界ではない。こういうことです。

力の世界では、素晴らしいナポレオンがとうとうセントヘレナに流されて、力尽き果てて福音書をひもといて、彼はびっくりした。このキリストというものにぶつかって、

「福音書は本ではなかった」

と言った。さすがにナポレオンは最後に本当にえらい告白をした。ヒルティーさんはいいことを私に引用して教えてくれたと思っている。ナポレオンもさんざん戦争を縦横無尽にやってたくさんの犠牲者を出して、けしからん英雄ですよ。けれども、最後に彼はキリストの前に降参した。

「福音書は本ではなかった。これは生きた何ものかであって、活動力を持っている。福音の伝播に対抗するもの一切をひきさらっていくところの力を持ったものである。そして、キリストは愛の炎を点火して、一切のものよりも強いところの自己愛を粉砕する。」

さっき言ったパウロが始めに持っていた自己義認、自己愛というやつを、

と。さすがにナポレオンは男らしいね。それで参ったと言う。降参したところから、本当のものが始まる。なまじっかな降参の仕方ではダメですから。研究なんてなおさらダメです。どうぞ、そういうことで、今日、新しく福音を聞いた人は素晴らしい事態であることに驚いていらっしゃると思います。大胆率直が一番いい。

「深みに乗り出せ」

と、これを忘れてはいかん。キリストという深みに乗り出して、何か行き詰まりがあるか。他に乗り出したら、行き詰まりますよ。しかし、キリストというこの驚くべき深みそのものに乗り出したら――今は深みの非常に足りない世界です。今の世界は間口ばっかり広い世界です――キリストという本当の深みの中に入ったならば、これはいわゆる原子力よりかもっと素晴らしい原始力があなた方の生活の根底力となる。